

普段は静かなまちが、 祭りの日は別の顔に。

社殿建立は慶長6(1601)年まで遡る、乙部町八幡神社の例大祭。火災などで資料が消失し、残念ながら祭りに関する詳細はわからないものの、乙部町の山車で最も古いものが緑町2の蛭子(えびす)山と言われ、山車人形の入っていた木箱には「明治20年」の記載があることから、少なく見積もっても、山車が供奉する祭りの形態はその頃から続いているといわれます。

現在、祭りに出る山車は、弁慶山(滝瀬)、宿禰山(元町1)、稲荷山(元町2)、大黒山(緑町1)、蛭子山(緑町2)、楠公山(館浦)の計6台。昼は子ども達が主役、夜は大人が山車を曳き、江差町同様に、祭りの日はまちが大いに沸き立ちます。祭りの終盤、ライトアップされたすべての山車が港に集結したあとは、太鼓合戦がはじまって盛大なクライマックスへと向かいます。

山車人形に残る言い伝え。

最も古い「蛭子山」の山車人形は、かつて人形を乗せた船が小樽・祝津に向かう途中、乙部沖で遭難しそれを助けた経緯からまちにもたらされたという。



叩け、叩け、叩け！ 怒涛の馬鹿囃子が席卷。

せたな町・北檜山区にある真駒内神社の歴史は、明治20(1887)年代後半に始まります。当時この地域は徳島県からの移住者が多く、その頃から大正までの祭礼行事には『だんじり』など徳島の風習を取り入れたものが多くあったとか。こうして、北前船がもたらした文化と独自の文化が混ざり合った北檜山区の祭りは、独特の発展を見せました。

先の2町の祭りとは大きく違うのは、山車のことを古くから「花山」と呼び、しかもその花山はスペースの大半を舞台に割いている点。ここで披露されるのは、子ども達による古典、新舞踊、民謡踊り。ちなみに、こうした踊りの文化はお隣の今金町にも根付いています。

クライマックスは、名物の太鼓合戦です。『馬鹿囃子』と呼ばれるリズムを渾身の力で叩き合い、その怒涛のせめぎ合いは、毎年誰もが魅了されます。



何をおいても祭り優先。

各町に共通するが、町民の多くは祭りのために時間と労力を惜しまない。その日は何としても故郷に帰るといふ出身者も多く、その熱量が祭りをより神聖なものにする。

乙部八幡神社例大祭

[乙部町]

